

## 大庄屋文書から見た酒田の世相（九）

須藤 良弘

内町組大庄屋・伊東家と米屋町組大庄屋・野附家の文書（酒田市立光丘文庫所蔵）から、句読点は筆者が付け加えたものである。

### 一、酒田湊と川船

酒田湊には諸国から多くの海船が入港する。海船からの荷下ろしや荷積み、その荷物の輸送に多くの川船が使われた。それをめぐっての多くの問題や事件等も発生した。次のイ、ロ、ハは伊東家文書『貞享二年乙丑十二月より宝暦十三末年迄之内池田家御用帳之内より書拔』からで、ニは野附家文書の宝暦十二年（一七六二）よりの『諸御用控帳』からである。

イ、元禄十年丑（一六九七）二月十二日、酒田町の玉屋長右衛門や加々屋太郎右衛門等問屋六十一名が「惣連印」して、三十六人衆年寄の加々屋与助・鑑屋、酒田町組大庄屋の栗林・渡邊、内町組大庄屋伊東・斎藤、米屋町組大庄屋池

田・野附に、次の「一札差上申事」が出された。

「川之内、上荷船・沖瀨取船・鶴ヶ岡、順番二被仰付候、自今已後、上荷・瀨取船・鶴ヶ岡登船入用之時分者、役人方江相断、船雇可申候、諸事滞無御座候様、役人方江相對可仕候、尤前日より入用相知申候分者、前日二断可申候（以下略）」。

問屋達の商品輸送のための川船使用により、海船から荷物の積み降ろしに従事する上荷船や沖瀨取船、港から赤川を経て鶴岡登りで荷物を運ぶ川船に支障をきたしたものと思われる。そのため、川船を順番に使うことを命じられ、問屋達は今後、船が入用の場合は役人に相談するというものである。

これを受けた年寄・大庄屋は同日、御町奉行所に、「前書之通、拙者共打寄、吟味仕候、自然問屋共相工、順番破り申様成儀仕候ハハ、僉儀之上、可申上候、以上」を提出した。大庄屋達が集まり、問屋達がたくらんで、順番送りを破ることがあれば、申し上げるといふものである。

同日に、川船の船頭と思われる染屋小路新四郎等六人、利右衛門小路九兵衛等十一人、その他二十の町の総計百五十五人、さらに内町三十五人、片町五十二人等九つの町、二百三十九人の「小船持」、内町組九郎左衛門等七人と米屋町組庄次郎等四人の「小船組頭」、仙助と長右衛門の「船肝煎」、小右衛門と彦作の「船荷指」、又右衛門等三人の「船組頭」、松兵衛等六人の「船持頭」、新兵衛等六人の「上荷役人」、五郎兵衛と弥七郎の「鶴岡船荷指」から次ぎの「一札差上申事」が年寄・大庄屋に出された。

「一、川之内、上荷船・瀨取船並鶴岡登荷物大小之川舟、順番願申上候處二、奉願候通、今度被仰付、惣船持者不及申上、船頭・水主共二難有奉存候、依之、手問為致申間敷旨、品々被仰付、奉得其意、舟仲間申合、少茂遅々仕申間敷事

一、沖瀨取船積口、庄内米五人乗百八拾俵、四人乗百四拾四俵、三人乗百八俵、御定之通積可申候、海船之船頭望二

而、不足積申候八八、運賃定之通可申請候、若川船之者共致勝手、積口不足仕候八八、米数勘定次第二俵掛り二運賃可申受候

一、川之内、上荷船・沖瀬取船共二臺木等人念可申候、勿論、右船、水主・船頭二老人・若輩者出し申間敷候、龐相成儀仕、俵物濡損仕候八八、并可申候、但破損儀、俄雨之儀者格別之儀御座候

右之通、手間無御座候様二急度相勤可申候、若、滞申儀も御座候八八、何時成共、順番相止候様二被仰付候共、少しも御恨二奉及間敷候以上」

順番を守り、決して運送がつかえたり、遅れたりしない事。船の米積みは、船頭・水主五人乗りの場合は百八十俵などを守り、海船の船頭に積数を少なく頼まれても規定の賃金を受け取るし、一方、川船の者共が勝手に積数を不足しても、俵数に応じての運賃にする。上荷船・瀬取船とも船体に念を入れ、船には老人や若輩者を雇わない。にわか雨で破損した場合以外に、俵物が濡れて損害を受けた時は弁償する。以上、運送が滞るようなことになり、順番が廃止されても少しも恨むことはないというものである。

これを受けた年寄・大庄屋八名は同月日、御町奉行所に、「前書之通、拙者共打寄、手間無御座候様二為相勤可申候、自然滞申儀御座候八八、立合吟味之上、何時成共申上候間、為相止可申候已上」を提出した。川船関係者が仕事が滞るようなことがあった場合は、吟味の上、荷物順番送りを廃止するというものである。

口、元禄十七年申（一七〇四）三月二十一日、「大小惣川船持仲間・無玉船差役人・無玉船組頭・無玉船荷指・大船組頭・大船荷指・船組頭・上荷役人」「吟味役人」の佐藤利兵衛・二木庄兵衛・鈴木市郎兵衛・鈴木九左衛門から酒田町の年寄・大庄屋八名に、次ぎの「乍恐以書付奉願候事」が出された。なお、無玉船は一人乗りの川船である。

「海船積荷物、又上方より積参候荷物、少々之分八、本船之てんま吉艘斗二而、送り申候分八其通り二仕罷在候所二、一兩年以來、雇てんま仕送申候由、承申候得共、慥成儀も見届不申候二付、只今迄不申上候、然ル處、先月末二罷成、

塩大分二参、方々へ上り申候得共、上荷船一圓雇不申候二付、迷惑二御座候、川船之者共方々かけ廻、見届申候處二、本船壹艘江てんま四、五艘宛雇船仕送り申候」

海船や上方から来た積み荷が少々であれば、本船に積まれているてんま船一艘だけに運送を認めていた。しかし一、二年前から雇いてんま船で運んでいるというわさを聞いていたが、見届けることもできず申し上げなかった。ところが先月末、大量の塩がほうばうに陸揚げされたが、上荷船は全然雇われなかった。それで迷惑している川船の者共がかけ回って見たところ、本船一艘あたりてんま船を四、五艘ずつ雇っていた。

「ケ様二仕候而者、末々上荷船雇申者無御座、當所川舟之所作旅船二被奪、迷惑至極二御座候、自今已後、てんま送り必至と相留、當所川船雇申候様二被仰付被下度旨、去年中願申上候所二、被為聞分、此末、本船之てんま壹艘之外出し停止被仰付候、相背、脇てんま雇送り荷物申者御座候八八、其船宿並海船共方より、為過料金三両宛六両出させ可申候由、御定被下候段、承知仕、大小之船持者不及申上、大勢之船水主まで難有奉存候以上」。

このようなことでは今後、上荷船を雇う海船がなくなり、酒田湊の川船の仕事は他国の船に奪われるので、これを厳しく禁止し、酒田の川船を雇うように願ひ出、去年、これが聞き届けられ、本船一艘あたりてんま船一艘だけ認められたものである。今、又このような事が起きたが、違反し、外からてんま船を雇った場合、海船と船宿に三両ずつ計六両の過料金を取るようになったというものである。

八、酒田湊内には、商い荷物運送以外にも多くの川舟が行き来している。年貢米の輸送や普請など庄内藩の仕事をする舟、幕府の年貢米である御城米の積み取りなどをする船もある。次は貞享三寅年（一六八六）十二月三十日、御町奉行所へ「舟肝煎書上ケ申候控」からの「御役舟之覚」である。

「一、四百五拾壹艘 御役舟 内、百拾五艘 御城米瀬取舟五人乗 同、九艘 同断四人乗 同、六拾五艘 同断三人乗 同、百貳拾壹艘 鶴岡同役方へ五人乗 同、九艘 同断四人乗 同、百三拾四艘 同断三人乗

同、八艘 同断式人乗

一、式千五拾艘 吉人乗 寅ノ御役舟

内、千五百四拾吉艘

上川原御普請所へ罷出申候

同、三百式拾五

艘 御米置場御普請所へ罷出申候

同、百艘 御城廻り御普請所へ罷出申候

同、八拾四艘 鶴岡・藤島・横山へ

罷出申候 此舟数四百式拾艘

但一日二吉艘之積り 小以式千三百八拾六艘」。

二、次は宝曆十三年末（一七六三）五月二日の「御城米並御雇船出船之節川舟水主賃錢定書之覚」である。酒田湊から出港する幕府領の年貢米を運ぶ御城米御雇船に米を運ぶ瀬取舟の船乗りの賃錢支払い条件と金額が記されている。

「一、未五月二日、御城米御雇船出船二付、罷成候瀬取川舟乗水主賃錢、濱出役見届之上書上ケ、船きも入専介相添、御役所へ指紙申請二差出候處、何分三日仲間致沙汰、申上候様二被仰付候二付、同三日御役所へ當番・非番共二打寄、評議之上、左之趣申上候處、御呼出被成候二付、同四日船組頭又右衛門、濱見分小屋へ招呼、左之趣申渡候、船肝煎専介罷出不申候二付、又右衛門へ申渡候」

瀬取川舟船乗りの賃錢について、浜出役の見届書を五月二日に船肝煎専介が御役所に差し出したところ、年寄・大庄屋が検討の上、差し出すようにいわれた。三日に御役所に月番も非番の者も集まり、評議をし、提出した。役所から承認を受け、四日に浜見分小屋に船組頭又右衛門を呼び、次のように申し渡した。船肝煎は来なかった。

「一、御城米御雇船出船二罷出候瀬取舟、朝立、御囲前、又八川之内二而相止、乗戻り之砌八、無賃錢

一、朝五ツ時より九ツ時迄天気見合、相止候節八、米瀬取候而も、瀬取不申候而も半賃錢五拾文二被仰付候

一、九ツ時より米瀬取積相止候節八、丸賃錢百文二被仰付候」。

御囲とは幕府領の年貢米を一時的に保管する御米置場（瑞賢蔵）のことで、瀬取舟が朝に出てきて、御囲の前や最上川の川内におつても、瀬取しないで戻った場合は無賃錢。朝八時頃から午前中、天気のため中止となった場合は、米の瀬取りをしても、しなくても半分の賃錢五十文。午後になってから米の瀬取積みが中止になった場合は一日分の百文。

## 二、商品の直取引の禁止

次の「覚」は宝永七年寅（一七二〇）四月、池田吉兵衛・上林七郎左衛門等九人の年寄・大庄屋から「惣問屋中 惣酒田御町中」に出されたものである。海船や他国商人との直接取引する問題である。

「一、先日申談候通、當年宮之浦方二海船居申候二付、海船二而、直賣買有之様相聞、問屋江付不申、直賣買之儀、何方二而も湊作法二無之儀二候間、急度御町中江申付度由御断申上候處、古来作法之通、被仰付候間、堅相守可被申候」。宮野浦に停泊している海船と品物の直接売買が行われていると聞いているが、直売買はこの港の仕来りにもないことである。それで町中に禁止するよう申し付けたいと役所に願ひ出たところ、前々からの仕来りを仰せ付けられたので、必ず守るよう。

「一、問屋之外御當地之者、旅人江穀類・諸色共二直賣買、古来之通仕間敷候、宿取次を以、前之通商賣可仕候」。問屋以外の酒田の者は、他国からの旅人と穀類や品物類の直売買を前からの仕来りのようにしないで、船宿の取り次ぎにより商売すること。

「一、他所御蔵米者勿論、古来作法之通、御蔵元取次二而賣買致、猥無之様可仕候、並、諸国商人・地商人共、穀類・諸色、旅人直賣買在之候様及承候<sup>（承け及）</sup>、古来湊作法二相違申候間、前之通宿取次を以、賣買可被致候、萬一相背候者在之候ハハ、御役所江申上、急度可被申付候」。他所の御蔵米（諸藩の売り払い米）は勿論であるが、米は御蔵元が取り次ぎし、米以外の穀類・品物類は諸国商人も地元商人も直売買しないで、船宿取り次ぎですること。違反した場合は奉行所に申し上げ、処分するといふものである。（野附家文書『諸御用控帳』）

### 三、たばこ作り禁令

たばこ作り禁令については、この研究論集九号の「六、江戸の情報」に若干触れているが、ここで全文紹介したい。たばこの売買・作付け禁止令は慶長十七年（一六一二）に出されたが、喫煙の習慣は全国的に広まった。幕府は寛永十九年（一六四二）になると、禁止を緩和する形で、年貢の対象となる本田畑だけへの作付け禁止令を出した。元禄十五年（一七〇二）にはさらに作付けを緩和し、前年十四巳年までの本田畑に、その半分までは作付けは許可するが、残りの半分には土地相応の穀類を植えることとした。

次の宝永元年申（一七〇四）の「覚」は、酒田でも幕府の命を受け、本田畑へのたばこ作付けの禁止と、その緩和の経過を述べ、禁令の度重なる変更にとまどっているのが感じとられる。酒田では前々からたばこ作りをしている者はいないが、今後、出てきた場合は申し上げると、年寄・大庄屋九名から御町奉行所に出されたものである。（伊東家文書、前記の貞享二年よりの『書拔』）

「今度御書出、本田畑二前々より多葉粉作り申間敷候由、被仰付候、去未（元禄十六年）暮中、江戸御書出を以、御触被仰付候二付、酒田御町中本家並名子・借宅之者迄、急度申渡候、然ル處、又候今度當申之年、たはこ作り之儀、去未之年之通、去々年午之年迄作り候高二半分作り、残り半分之所者、土地相應之穀類可作之由、御書出ヲ以被仰付、奉得其意、當御町中へ承届申候所二、酒田御町中たはこ作り申候者、無御座候、若、此未たはこ作り候者御座候ハハ、可申上候、為其、拙者共連判書付差上申候以上」。

## 四、火災をめぐる

イ、『酒田市史年表』の宝暦十二年（一七六二）に、「九月十三日地震による家屋倒壊のため、観音小路から出火、伝馬町・南蔵院小路・下中町等四二三軒を焼失する。観音堂も焼ける。（野附文書）」。この年表で引用した野附文書についてはわからないが、野附文書の宝暦十二年よりの『諸御用控帳』ではかなり異なる。

次に全文を紹介するが、火元は観音小路の清三郎後家の家で、焼失戸数四百十二、観音堂は残る。特に地震については、九月十五日とし、二度あったが、終わりは身体に感じないほどであったと簡単に記し、地震が原因の火災とは記述されていない。

「宝暦十二年午九月十三日、観音小路より出火、其節類焼之町数之覚 一、観音小路 一、上臺町東側不残類焼 一、今町両側半分程、但観音堂残ル 一、寺町銅や佐七邊迄 一、町離町式軒 一、南蔵院小路不残 一、荒町四、五軒程 一、傳馬町不残 一、肝煎小路不残 一、秋田町東片側 一、下中町式丁余 一、下内匠町式丁程 一、粕谷小路 一、持地院小路 家数ノ四百拾式軒、内式軒町離 右者、昼八ツ時より出火いたし、暮六ツ半時迄類焼有之候、十五日二、於て御役所、御吟味被仰付候、火元観音小路清三郎と申者後家」。

「宝暦十二年午九月十五日昼七ツ時分地震、七半時地震、右両度共二終不覚程之地震ニ御座候」。

口、宝暦十三年、山王堂町五郎右衛門の稲小屋からの出火で、被害は記されていないが、放火によるとしている。出火の原因に放火というのが多く見られるが、失火の責任回避のためと思われる。処分は謹慎である。奉行所での吟味には足輕目附・同心・大庄屋・肝煎・書役・小使が出席している。奉行中田七郎兵衛の時のことである。

「未十一月廿六日之夜七ツ時前、山王堂町五郎右衛門裏稲小屋より致出火候二付、吟味被仰付候、御吟味之上、付火



之趣申上候、依之、五郎右衛門・慎被仰付候、御吟味之節、御役所へ御出席之御役人、御足輕目・附山口角平次・小久保彦兵衛、御同心・杉原新蔵・村上徳兵衛、野附圓太、肝煎久右衛門、書役甚蔵、小使源治、右何れも相詰候、中田七郎兵衛様御勤之節」。(野附家文書『諸御用控帳』)

八、宝暦十四年申正月二十九日、八軒町にある荒瀬郷の代家守伊五郎からの出火の扣と肝煎半兵衛から内町組大庄屋野附・池田の「御両所殿」に出された注進書である。

「正月廿九日之夜、荒瀬代家守伊五郎裏小屋より出火仕候而、本家・小屋共二焼失仕候、翌卅日御役所二而、御吟味被仰付候扣、御注進申上候、今夜五ツ半時頃、拙者支配八軒町荒瀬代家守伊五郎と申者家裏二有之候小屋より出火仕候、依之御注進申上候以上」。

伊五郎についての次の「家内付」が出された。「八軒町火元 年七十三伊五郎 同四十三同人倅久兵衛 病氣同三十九久兵衛女房 同六才同人子幸八 同四才同宇八 同式才同娘みよ 同二十三同人召仕又右衛門 同二十三同下女なつ右者伊五郎家内、如此二御座候」。

「御吟味罷出候者之扣 八軒町火元伊五郎 同人倅久兵衛 病氣久兵衛女房 同人召仕又兵衛 同下女なつ 東隣善五郎 五人組久助 向家十左衛門・五郎右衛門・伊之介 自身番十左衛門・五郎右衛門・源十郎 辻番傳三郎 敲番松兵衛 朝五ツ之中頃二相詰、夜九ツ半頃二引取申候」。(野附家文書『諸御用控帳』)

三十日に吟味が行われ、午前九時より翌日午前一時まで行われたようである。敲番とは火の用心のために、拍子木を叩きながら夜回りする番人と思われる。奉行所に呼び出されたそれぞれの口書、注進書、本家と小屋の絵図(家續書)などが提出されている。

## 五、世相あれこれ

イ、貞享四年卯（一六八七）二月、遊佐郷宮野内組宮海村の善五郎の語り（騙り）事件である。「宮海村善五郎と申者、方々語り仕候由」で、二月七日までの善五郎の所在確認が行われ、八日に「御町廻衆・御同心衆」より次ぎのような処分が行われた。騙りの内容はわからないが、微罪と思われ、今後も酒田に来て騙りをした場合に厳罰にするが、今回は宮海村に隣接する小湊村の渡し場から追い帰しである。

「重而、此方へ参、語仕候ハハ、見当次第、急度可申付よし吉兵衛宅ニ而堅申渡し、久七・五人組と相添、小湊渡り迄送セ、渡し守ニ堅申付帰り申候」。（伊東家文書『池田家御用帳（書拔）』）

口、宝暦十二年（一七六二）、代々大庄屋役を勤め、当時総代名主であつた幕府領の千川原村金古（金子）家と酒田米屋町組大庄屋・野附家との縁組成立の経過である。

五月二十一日、丸岡御料の金古喜太郎より野附と同役の米屋町組大庄屋池田吉兵衛様に縁組仲立ちの依頼書状、「拙者娘とよと申者、當年拾五歳ニ罷成候、御同役野附圓太事、内縁在之候ニ付、娘ニ取向申度段相談いたし候、於此方何之指障無之候間、圓太方より願出候ハハ、宜敷御取繕可被下候」。

同年午六月、野附圓太の「使」池田吉兵衛から御町奉行所の中田七郎兵衛様に次ぎの「乍恐書付を以奉願候」が出された。

「丸岡御料千川原村金古喜太郎儀、兼而拙者縁者ニ御座候処、右喜太郎娘當年拾五歳ニ罷成候、依之奉願候、拙者俸野附圓治所へ縁組仕、引取申度奉存候処、千川原村名主所より之書状忝通・寺證文指上申候、奉願候通、被仰付被下置度奉存候以上」。

午六月、「大山御料余目村 禅宗宝護寺」より「宗旨御役所」への「寺證文之事 丸岡御料千川原村金古喜太郎娘とよ儀、代々禅宗二而、拙寺旦那二紛無御座候、此末他領へ縁付、宗旨替仕候共、構無御座候」。

翌十三年未八月、野附圓太・池田吉兵衛より宗旨御役所に次ぎの「覚」が提出された。とよは酒田の天正寺の檀家となった。「一、禅宗天正寺 野附圓太伴圓治妻 右圓治妻大山御料千川原村金古喜太郎娘二御座候、去年六月、奉願

候所被仰付、同九月引取申候 右之通御料より縁組仕候間、申上候以上」。(野附家文書『諸御用控帳』)

八、宝暦十三年、どのような勤方をしたのかわからないが、奉行所から聞かれ、勤方が悪いとして目明役を取上られた重助と重蔵の代わりに、仁兵衛が跡役となった。その支度金を六年賦での御町用金からの拝借願いである。

「覚 未四月十九日目明役御取上ケ被仰付候 傳馬町重助・船場丁重蔵、勤方不宜趣、於御奉行所二及御聞、目明役御取上ケ被仰付候二付、跡役米や町仁兵衛江末ノ四月廿日二被仰付候、依之、為支度金、金壹両貳歩、六年賦拝借被仰付證文之覚」。

未四月、仁兵衛と三十六人衆年寄役上林、三町組大庄屋栗林・伊東・野附の五人から御町奉行所中田に次の「覚」が出された。なお、願いの日は山王祭礼で、三人はいそがしかったことから、野附圓太一人だけが申し上げ、願いは聞き届けられた。

「一、金壹両貳歩 右者拙者儀、當分目明役被仰付候二付、支度為入用、御町用金之内より拝借被仰付、難有仕合奉存候、當未ノ暮より子ノ年迄六年賦、壹ケ年壹歩ツツ急度上納可仕候間、相渡申候様、御末書可被成下候」。「中田七郎兵衛様御勤之節、尤、廿一日二山王祭礼二付、外仲間取込居候由二而、委細圓太吉人二而、申上候所、無相違被仰付候」。(野附家文書『諸御用控帳』)

二、宝暦十四年(一七六四)、酒田町奉行が中田七郎兵衛から金井男四郎に替わった。急な人事異動のようで、中田は夜通しで鶴岡に向かっている。三月三日に「御礼日」とあるが、同年同月日藩では七十歳以上の男女に米二千俵余を

下賜している（酒井世紀）。その日、中田は普請奉行に任命されている。中田には酒田・内町・米屋町三組の大庄屋栗林等六名から三月六日に祝儀が献上された。祝儀の「七嶋」はわからない。なお、三十六人衆からの祝儀は「塩引二尺御樽壹荷、但三升入塗樽」である（三十六人衆御用帳）。

「宝曆十四年申三月朔日之夜四ツ時、急二御町奉行中田七郎兵衛様鶴岡表より御用申来、夜通し二御登被成、三日之御礼日二、於御城、七郎兵衛様御普請奉行御役被蒙仰、爰許御町奉行御役、同日於御城、金井男四郎様被蒙仰候、依之七郎兵衛様へ為御祝儀、左之通（名前略）六人之方より差上申候　御祝儀　一、七嶋　拾五枚　御樽着」。

七郎兵衛は祝儀に礼を述べ、献上者がよく勤めていることを家老にも申し上げたところ、年寄・大庄屋九人に御町火消料より一両ずつの褒美、さらに家老からも褒美があると次のように伝えている。

「右之通差上申候所、其節七郎兵衛様御逢被成、右之御礼厚被仰、其節被仰渡候ハ、各是迄出精二相勤候段、先頃罷登候節、御家老中へも申上候所、御満悦被召置候段被仰聞候、依之、年寄・大庄屋九人江老入二金壹両ツツ御町火消料之内より被下置候、猶又近日、御家老中よりも何れ御評議之上、御褒美在之筈之由被仰渡候」（野附家文書『諸御用控帳』）。外にも筑後町肝煎、御同心八人、御帳付二人にも「出精二相勤」として御町火消料や御町用金から褒美が出されている。亦、文久三年（一八六三）、水死し、流れ着いた女房・子供の死骸を届けなくて、夫がいずれも貰い受けたことが、「穩便に」処理したこととして藩に聞こえた。藩ではけしからぬとして、二月二十日、中老酒井兵部と末松十蔵から酒田町奉行金井國之助に取り調べの上、詳細の報告を求めた。「流寄候を、孰茂穩便二取仕舞候趣相聞、不埒之儀二付、右始未支配尋申付、追而取調可被申聞候」。

この事件の内容は、「酒田六軒小路　源八　右女房並同人子三歳二相成候小兒共、先月十四日之夜水死いたし、女房之死骸八其後高野濱上御米置場下江流寄候を、同所之者見当り、其場江埋置候を源八聞及び、右死骸貰請、小兒之死骸八同月廿五日能登興屋地方江流れ寄候を、是又貰請、孰茂穩便二取仕舞候趣、相聞候事」。（野附家文書『酒田町組米

屋町組御用留牒』。処分については記録されていない。